

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。ただし、問題の都合上、本文の一部を改め、省略した箇所があります。

——私（正雄・マー坊）の家は、祖父の代から東京の高円寺で和菓子屋「松野屋」を営んでいたが、父が家族に無断で高利貸しの中野に借金をしていたことが分かった。父とはろくに話し合いもできないでいる。

翌朝、私が起こると、もう父は出かけてしまっていて、その日から、家に帰って来なくなった。と同時に、中野の手下らしき男から、一日に何度も、「親父を出せ。金を返せ」と、催促の電話が掛かってくるようになった。私もその中の何回かは電話に出たが、どすの利いたヤクザっぽい声で、脅迫されているみたいで怖かった。今までのほんとしていた母は、電話が鳴る度に逃げることなく、気丈に対応していたが、三日目にととう店を閉じた。母の頬は痩せて、目だけがギョロギョロしてきたのが、はっきり分かった。

ゲンさん（松野屋の和菓子職人）もその日から、来なくなった。

「ゲンさん、やめたの？」

「そう。居てもらっても仕方ないから」

「やっぱり、取られるの？」

店も家も、とは言えなかった。母は私の問いに答える気力もないくらい疲れ果てて、作業場の方をぼんやりと眺めている。いよいよ、「松野屋」が壊れていく。

父親にも腹が立つたが、私の高利貸し中野への怒りは、憎しみになっていた。中野の顔は知らないが、中野が経営する南口の旅館は知っている。住宅のミッシュウした一画にあり、木造アパートのような二階建てに「一楽旅館」と看板が掛かったちやちい旅館だ。きつと、悪いヤツばかり泊める旅館で、人を騙す高利貸しの隠れ蓑になっているに違いないと思った。

「松野屋」が壊れる。

「松野屋」が無くなる。

中野を殺してやりたいという衝動に駆られた。台所から出刃包丁（刃が厚く広い、先（の）とがつた包丁）を持ってきて何重にもタオルで包み、脇に挟んで外に飛び出した。夕方の商店街は人が多くてイヤだから、裏道、わき道を選んで駅に出た。高架下をぐぐり駅の南口から「一楽旅館」を目指して、速歩きで行く。気が昂ぶっているから、息が上がってくるのも早い。

「松野屋」が壊れる。

「松野屋」が無くなる。

中野を刺すのだ。悪人の高利貸しを殺すのだ。

駅の南口から、どこをどう通ってきたか分からないが、十メートル先に「一楽旅館」の看板が見えてきた。

足が止まった。息がはーはーしている。息がはーはーしているが、苦しくはない。

足ががたがた震えはじめた。

すると、息がはーはーするのは止まった。

酸っぱいものが込み上げてきた。

うえーと側の電信柱に吐いた。また、うえーつうえーつと吐きそうになるが、今度は出るものがなかった。吐き気がオサまる、と、膝が震えてきて、腰が抜けて立ち上がれなくなった。脇の下に挟んでいる包丁が急に重たく感じ、すっかり陽の沈んだ道端に、へなへなと座り込んでしまった。

私に人を殺す勇氣はない。

血だらけになるのは怖い。

人を殺したら、殺人罪で刑務所に入る。

いやだ。そんなのは死んでもいやだ。

電信柱に掴まり、やっと立ち上がった。足を踏み出すと、ふらつと立ち眩みがした。ゆっくりゆっくり歩いて、住宅街を抜け、

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。ただし、問題の都合上、本文の一部を改め、省略した箇所があります。

——私（正雄・マー坊）の家は、祖父の代から東京の高円寺で和菓子屋「松野屋」を営んでいたが、父が家族に無断で高利貸しの中野に借金をしていたことが分かった。父とはろくに話し合いもできないでいる。

翌朝、私が起きると、もう父は出かけてしまっていて、その日から、家に帰って来なくなった。と同時に、中野の手下らしき男から、一日に何度も、「親父を出せ。金を返せ」と、催促の電話が掛かってくるようになった。私もその中の何回かは電話に出たが、どすの利いたヤクザっぽい声で、脅迫されているみたいで怖かった。今までのほんとしていた母は、電話が鳴る度に逃げることなく、気丈に対応していたが、三日目にととう店を閉じた。母の頬は痩せて、目だけがギョロギョロしてきたのが、はっきり分かった。

ゲンさん（松野屋の和菓子職人）もその日から、来なくなった。

「ゲンさん、やめたの？」

「そう。居てもらっても仕方ないから」

「やっぱり、取られるの？」

店も家も、とは言えなかった。母は私の問いに答える気力もないくらい疲れ果てて、作業場の方をぼんやりと眺めている。いよいよ、「松野屋」が壊れていく。

父親にも腹が立ったが、私の高利貸し中野への怒りは、憎しみになっていた。中野の顔は知らないが、中野が経営する南口の旅館は知っている。住宅のミッシュウした一画にあり、木造アパートのような二階建てに「一楽旅館」と看板が掛かったちゃちい旅館だ。きつと、悪いヤツばかり泊める旅館で、人を騙す高利貸しの隠れ蓑になっているに違いないと思った。

「松野屋」が壊れる。

「松野屋」が無くなる。

中野を殺してやりたいという衝動に駆られた。台所から出刃包丁（刃が厚く広い、先ののとがつた包丁）を持ってきて何重にもタオルで包み、脇に挟んで外に飛び出した。夕方の商店街は人が多くてイヤだから、裏道、わき道を選んで駅に出た。高架下をぐぐり駅の南口から「一楽旅館」を目指して、速歩きで行く。気が昂ぶっているから、息が上がってくるのも早い。

「松野屋」が壊れる。

「松野屋」が無くなる。

中野を刺すのだ。悪人の高利貸しを殺すのだ。

駅の南口から、どこをどう通ってきたか分からないが、十メートル先に「一楽旅館」の看板が見えてきた。

足が止まった。息がはーはーしている。息がはーはーしているが、苦しくはない。

足ががたがた震えはじめた。

すると、息がはーはーするのは止まった。

酸っぱいものが込み上げてきた。

うえーと側の電信柱に吐いた。また、うえーつうえーつと吐きそうになるが、今度は出るものがなかった。吐き気がオサまる、膝が震えてきて、腰が抜けて立ち上がれなくなった。脇の下に挟んでいる包丁が急に重たく感じ、すっかり陽の沈んだ道端に、へなへなと座り込んでしまった。

私に人を殺す勇気はない。

血だらけになるのは怖い。

人を殺したら、殺人罪で刑務所に入る。

いやだ。そんなのは死んでもいやだ。

電信柱に掴まり、やっと立ち上がった。足を踏み出すと、ふらつと立ち眩みがした。ゆっくりゆっくり歩いて、住宅街を抜け、

南口の駅前に戻ると、電気の明るさにまた、目が眩んだ。

「マー坊！」と声がした。

むーさん（松野屋と古くから取り引きのある米屋の武藤さんのこと）だ。自転車に乗ったむーさんが私の方に向かってきて、目の前に止まった。

「マー坊！ どうしたんだ。顔が真っ青だぞ」

むーさんの顔を見たら、涙が溢れてきた。むーさんの自転車の荷台に、タオルに包んだ出刃包丁を載せた。

「何だこのタオル？」

「出刃包丁……。殺そうかと思って」

私は泣きながら父のことをむーさんに話した。

「そうか、そうか。ここで会えてよかったよ。もう、泣くな」

むーさんに話したら気持ちスツとして、体の震えも止まった。

「親父さん、中野に騙されたんだな」

「むーさん、中野知ってるの？」

「ああ、ちよつとな」

「マー坊の親父さんはいい人だけど、いい人すぎるんだよな。でも、息子に出刃包丁を持たせるようなこと、しちゃいけないな。

松野屋の店が担保（借金の）に取られたという噂は本当だったんだ。そうだったんだ」

やっぱり、あの日、ゲンさんがあちこちで喋ったんだ。

「マー坊、自転車の後ろに乗れ」

「この出刃包丁はオレが預かるからな」

と言って、むーさんはズボンとベルトの間に、出刃包丁を差し込んだ。むーさんのその仕草が堂に入っていて、思わず、

「カッコいい」

と、口に出てしまった。

私は荷台に飛び乗ったが、荷台がごとくて尻が痛かった。股も大きく開かないと、跨ぎきれない。

「痛っ！」

①「おお、痛いか。出刃包丁で刺されたらもつと痛いぞ」

さつきまで真っ白だった頭の中に、血液がようやく流れ始めてきた。むーさんはいつものように弾みをつけて自転車に乗ると、横に真っ直ぐなハンドルを両手でしっかり握り直し、自転車を漕ぎ始める。夜の高円寺の駅前には、人がいっぱいスピードは出せないけれど、むーさんの自転車は、すると人の間を小気味よくすり抜けて行く。体中の力がふつと抜けて、私は、むーさんの背中に頭をもたせ掛けた。

「むーさん、松野屋いつ取られるんだろう」

「そんなすぐって事はないさ」

「お父さんは無責任だよ。一人でいなくなっちゃって」

「そうだな。マー坊もおふくろさんと、これからどうするか考えなきゃな」

「分らないよ」

「そうだよな。まだ高一だもん」

「僕はお父さんとお母さんとも暮らしたくない」

むーさんとなら暮らしたいと言いたかったけど、むーさんは他人だし、一緒に暮らせるはずがないから、言わなかった。

「学校はどうするんだ」

「中退して、働くよ」

「オレは中卒だけど、高校ぐらいは出た方がいいと思うけどな」

お尻は痛いけど、むーさんの自転車はまったくゆれしない。五十ccオートバイの後ろに乗ったことがあるが、オートバイよりも安定している。

「むーさんの自転車気持ちいい」

「そうか。この自転車とは長い付き合いになるからな」

「どのぐらいの付き合いになるの」

②「そんなことより、本当に中退してもいいのか」

「いいんだ。学校も好きじゃないし、部活もやってなかったし……」

中島小百合（中学時代の同級生）ともうデート出来ないし、むーさんにも会えないと思ったら、また、泣きだしてきた。

「むーさん、僕とお母さん、高円寺にも居られなくなるんだ」

「そんなことはないさ。松野屋がなくても高円寺に居ればいいさ」

むーさんはそう言うが、松野屋のない高円寺には居られない。居たくない。

「何処に居ても、おふくろさんだけは、マー坊が守ってあげるよ」

「むーさん、うちのお母さん⁴ケツコウ強いんだ。お母さん、お父さんと別れるって。もう決めたって言ってたよ」

「そうか。おふくろさん、そう言ってたか」

Y 私は、むーさんの背中から響いてくるむーさんの声を、しっかりと心に留めた。

むーさんは私を「松野屋」の裏口に下ろすと、「マー坊、しっかりしろよ」と言っ、ウチの中に入らずに、帰って行った。

あくる日からも電話がじゃんじゃん鳴り続けた。電話機に座布団を被せて、電話が鳴っても出ないようにしたら、中野の手下で強面の三十歳くらいの男が、裏口から毎日のようにやってきて、親父を出せとしつこく言った。裏口の鍵を掛け、家の中で母と二人身を潜めるようにしていると、裏口の戸をガンガン叩いて、

「おい、こらあー、松野、出てこい！ 居留守使うな！ 金返せ！」

と、隣近所に響き渡る大音声で嫌がらせをするようになった。母は見る間にげっそりと痩せてきた。

夏休みなのに、高利貸しの取り立てが恐くて家から出られないなんて、これ以上我慢できない。

「お母さん、お父さんのいる所、知ってんじゃないの。もうヤツらに、教えてしまいなよ。オレ、こんなのイヤだよ！」

「本当に知らないの。お父さん、何度か電話を掛けてきてたかもね。電話に出ないもんだから、連絡取れなくて、困っているんじゃないかしら……」

父を庇う母に、今度は腹が立った。

夏休み中ずっと、高利貸しの嫌がらせは続いた。買い物や用足しは、日が暮れてからまるで犯罪者みたいに辺りを見回して、そつと出て、そつと帰ってくる生活だ。相変わらず父の行方は分からない。母も本当に知らないようだ。週に三回は必ず「松野屋」に来ていたむーさんとも、あの時以来会っていない。むーさん、どうして訪ねて来てくれないのだろう。マー坊、どうしてると、顔を見に来てくれてもいいのに。むーさんに会えない不安と不満が、頭の中で渦まいてくる。

夏休みもそろそろ終わろうというある日の夜、私がテレビを観ていると、母が居間で正座して、

「正雄、話があるの。ここに座って」

と、いつもは父が座る場所を指差す。この数週間で母はすっかり頬がこけてしまい、目だけがぎろぎろしている。

「明日から、お店を開けます。おにぎり⁵と煙草^{たばこ}を売って、正雄と二人で、追い出されるまで頑張ろうと、決めました。だから、正雄も手伝ってください。いいですね」

母の改まったきつぱりとした物言いに、「はい」と、素直に答えるしかなかった。

「松野屋」で煙草を売り始めたのは、父の代になってからであった。店の左隅の、和菓子^{いざなり}の進物^{しんぶつ}（人へのおくりもの）セットを並べていた陳列棚を取り払って、キャスター付きの煙草ガラスケース台を置いて売っている。和菓子やおにぎりに比べると煙草の利幅は小さいけれど、数売ればそれなり⁵のガクになるし、売れ残る心配がないから気楽だと父がよく言っていたことを思い出した。

煙草は利幅が小さくても、今は少しでも売って生活していかなければならない。それに、「おふくろさんを守ってやれよ」と、むーさんにも言われた。

母はぎろついた目つきで私をしつかり見つめながら、

「店を開ければ、中野の手下がもつと頻繁^{ひんぱん}に来るかもしれないけれど、商店街の人たちが見ているから、ランボウ^{ランボウ}なことはできないでしょ。正雄も堂々としていなさい」

③ 今夜、母は、父への定まらない想い^{おもひ}に、はつきりと決着を付けたのだ。こんなに遅い^{おそ}母を見たのは初めてであった。

《店を開けて二日目をむかえた。》

むーさんがおにぎり用の米を持ってきた。昨日、母が注文したのだろう。

「いよつ、マー坊、元気にしてたか」

むーさんは自転車の荷台から米袋^{こめふくろ}を下ろしながら、作業場でバット^{料理に使う浅い容器}におにぎりを並べている私に声を掛けてきた。あの日以来のむーさんの自転車だ。あの日以来のむーさんの声だ。

「むーさん！ どうしてたの」

「うーん、ずっと店休んでたぞ」

「店閉まつても、来てくれればいいのに」

④ 私は少し恨み^{うら}がましく言ってみた。出刃包丁のことも聞きたかった。昨日の夜、中野の手下が煙草を買いに来て、金も払わず脅^{おど}して帰って行ったことも言いたかった。

米袋^{こめふくろ}を下ろし終わったむーさんは、私の側に来て、私の肩^{かた}に手を置いた。むーさんの手の平の硬さが、Tシャツの上から感じられる。

「店開けられてよかったな。マー坊、よく手伝ってるんだってな。マー坊、学校はちゃんと行けよ。行くんだぞ。いいな」

むーさんともつと話したがかったのに、むーさんはそう念を押^おして、裏口からさっさと出て行くので、後を追いかけて外に出ると、もう、自転車に乗ったむーさんの背中しか見えなかった。むーさんは、私に学校に行けよということを、どうしても言いた

かったのだ。

母は毎日毎日、おにぎりを作る。前よりももつと丁寧^{ていねい}に丹精^{たんせい}を込めて作っている様子だ。「松野屋」のおにぎりの客は父が行方不明になる前よりも増え、夕方には売り切れてしまうこともある。

「明日は、あともう一回ご飯を炊^たき足そうかしら」と、母はおにぎりに意欲満々だ。きっと、おにぎりを作ることで、「松野屋」が取られることを忘れようとしているのだ。

おにぎりがよく売れるので、むーさんが米の配達に「松野屋」に来ることが多くなった。

いよいよ、明日から高円寺阿波踊^{あわおど}りという朝にむーさんが、米を持ってきた。

「奥さん、今日の米は特上の特上だよ」

と、鼻歌を歌いながら米袋を下ろす。米袋を下ろし終わったむーさんが、母が店番しているのを見定めてから、そつと私を手招きするのでむーさんの側に行くと、あの夜のタオルに包んだ出刃包丁^{でんぱうちょう}を手持っていた。

「マー坊、台所の包丁、全部持って来い」

「なんで？」

「なんでもいいから。それと、バケツも」

むーさんが何をしたいのか全然見当が付かないけれど、言われるままに包丁とバケツを持ってくると、むーさんはそれらを持って裏口の外にある水道栓^{せん}の所に行つて、バケツに水を入れ、その場に屈^{かが}みこんだ。そこにはいつの間にか砥石^{といし}が三本置いてあつて、バケツの水でちよつと砥石を濡^ぬらすと、むーさんは包丁を研^とぎ始めた。

「むーさん、包丁研ぐのー」

「オレ、若い頃^{こころ}大工の見習いをやってたことがあるんだよ。ノミやカンナ^{いづれも木材を加工する際に用いる道具}の刃を研ぐのも上手^ういんだぞ。包丁も切れ味よくなるぞ」

あの夜のことを包丁に引つ掛けて、むーさんは私に何かを言おうとしているのかどうかよく分からないけれど、むーさんの包丁

を研ぐ姿は様になっていて、カッコいい。むーさんの動きは、何をやってもカッコいい。

「へえー、そうなんだ。でも、包丁研ぐのに砥石が三つもいるの？」

「荒砥と中砥と仕上げ砥の三種あるんだ」

「むーさん、本格的だね」

むーさんの研ぎで包丁の刃がキラキラ輝いてきた。しゅっしゅっと包丁を研ぐリズムカルな音を聞きながら、むーさんの研ぐ姿を見ていると楽しくなってきた。むーさんもまた、鼻歌を歌っている。

「あら、むーさん、包丁研いでくれるの？」

母がお客の切れ間に、裏口から顔をのぞかせた。

「包丁の切れ味は、料理の味につながりますからね」

「お祖父ちゃんがよく研いでくれていたんだけど、亡くなってからは、そのまんま。出刃包丁なんて二年も三年も使っていないわ」

台所から出刃包丁が無くなっていたことを、母は全く気が付いていなかった。

むーさんが、ピカピカに研ぎあげた出刃包丁を目の上にかざして、親指の腹で出刃包丁の刃を撫でて、研ぎ具合を確かめる。

「奥さん、この出刃だと、魚が上手く捌けますよ」

「本當ね。随分と錆びてたでしょ。今夜は鰯のたたきでも作ろうかしら」

「いいですね」

「むーさんにもご馳走しなくっちゃね」

「お気持ちだけイタダいときますよ」

むーさんと母の会話を聞いていると、中野を刺してやろうとしたことも、毎晩のように中野の手下がやって来て、脅し文句を言つて煙草の金を払っていかないことも、みーんな、みーんな、なーんにもなかったことのように思えて、「松野屋」に穏やかな

空気が流れる。久しぶりに味わう気分だ。

母は十個ほど手際よくおにぎりを作つて、また、店に戻る。むーさんも最後の包丁の仕上げをしている。バケツの水を片手で掬つて砥石に振りかける度に、包丁の輝きが増してくる。むーさんは研いだ包丁三本を、バケツの水できれいに洗い、地べたに敷いたタオルの上に、丁寧に並べる。狭い路地の空からさす夏の陽にキラキラ光っている。

むーさんは水道で手を洗うと、ズボンの後ろに差し込んでいた布に砥石を包んで、自転車の荷台に入れた。

「マー坊、布巾できれいに水つ氣を取つて、台所に戻しとけ」

と言つて、この間と同じようにさつさと自転車に乗つて、帰つて行つた。むーさんに言われた通りに、乾いた布巾で一本一本丁寧に拭いて、台所に戻した。むーさんが丹念に研いだ包丁を、人を刺すという馬鹿げたことで持ち出すなんてことは、二度としてはいけないと思った。

《結局、私の一家は店も家も失うことになり、両親はその年の冬に離婚し、私は高校を退学した。私は伯母の元に身を寄せる母とは離れ、米屋をやめて故郷の長野へ帰るむーさんについて行つた。長野では、むーさんとその母（和子）の三人で暮らし、近所の川上リンゴ園を手伝いはじめた。それから一年が経つた。》

やつと、むーさんの家に帰ることが、「自分の家に帰る」と、違和感なく思えるようになってきた。

どこのリンゴの木も葉っぱだけになっていて、これからまた、冬に向けての作業が始まる。山からの日暮れの風はかなり冷たいが、冬のしびれる冷たさを経験した後だから、生温かく感じるくらいだ。

和子さんが作っている干し柿が、軒先（屋根のほり）に吊り下がっているのが見えて来た。軒先の玄関脇には、むーさんの自転車が置いてある。

「ただいま！」

玄関の引き戸を開けて入ると、見慣れない男性の革靴と女性の靴が、きれいに揃えて並んでいた。革靴を履いてくるお客さんで誰だろう。

遠くの親戚の人でも来ているのだろうか。

玄関から台所に入ると、和子さんは台所にいない。隣のこたつの部屋の様子に、耳をそばだてる。

「マー坊か？」

むーさんが仕切り戸越しに声を掛ける。

「ちよっと、こっちに来てくれるか」

改まった雰囲気だ漂ってくる。

台所の仕切りのガラス戸を開けると、目の前に母が座っている。母と目が合う。

「お母さん、どうしたの？」

と言いながら、目を動かすと、母の隣に畏まって正座をしている男がいる。

父親だ！

二度と会うことはないと思っていた父だ。

去年のクリスマスの夜とは打って変わって、こざつぱりした恰好をしている。

父は私の顔を見ることがせず、俯いたまま殊勝げに（おとな）座っている。

「何でお前がここにいるんだよ！」

思わず大声を張り上げてしまった。

「落ち着いて、まあ、座れ」

と言うむーさんの言葉を合図に、和子さんが「マー坊のお茶を淹れて来ようね」と立ち上がる。そして、自分の座っていた席に座るよう私を促し、台所に入っていく。

母とは時々電話で話をしていたから、長い間会っていないという感じはしないが、父とは、何年も会っていない人に会う思いだ。

この一年、私の頭からすっかり消え去っていた人なのだ。

「お父さんとお母さん、マー坊に折り入って話があるというので、今日、来られたんだ」

折り入って、何の話だよ。去年のクリスマスで離婚もしたし、家も取られたし、これ以上、何の話があるっていうんだよ！何もかも、決着してんじゃないかよ！と、怒鳴りそうになるが、むーさんの真剣な物言いに、気持ちを抑える。

和子さんが私の前にお茶を置いてから、私の脇にびったりと座る。

「旦那さんからマー坊に話してください」

と、むーさんが父に話を差し向ける。

父はうな垂れた首を横に振る。

「それじゃあ、奥さんから……」

母もむーさんに懇願するような目を向けて、首を横に振る。

「じゃ、私から……」

両親から折り入った話というのに、何で二人とも首を横に振って、むーさんに言わせるんだよ！^⑥ またまた、怒りが込み上げる！

「実はな、お父さんとお母さん、離婚したんだけど、将来のことをいろいろ考えて、これから一緒に暮らすそうなんだ。それで、マー坊とも、三人揃って暮らしたいって仰ってんだ」
心臓が止まりそうになる。

「勝手すぎるよ！ お母さんはこの男が何をしたか分かってんでしょ！ なのにまた、この男と一緒に暮らすの！」
父のことをどうしても「お父さん」と呼べない。

この馬鹿野郎な男と血の繋がっていることさえ恥ずかしい。

なのにこの男と一緒に暮らそうとしている母が、フケツで気持ち悪い。

やっと、母が口を開く。

「正雄の気持ちは、よく分かつてるの。だけど、血の繋がりがりもギリもない他人のむーさんに、あんたの面倒を見てもらっているのは、本当に申し訳なくて……親子と一緒に暮らすのは当たり前のことだし……」

「それを壊したのは、この男じゃないか！」

「マー坊、お父さんのことを、この男っていうのは言い過ぎだぞ」

と、むーさんに窘められても、この男としか私には言えない。

いつの間にか、和子さんの右手が私の膝の上に載っている。和子さんの手の平の温かさがズボンの上から伝わってくる。

「お父さんね、あれから新宿で真面目にケイビの仕事をしているの。私もね……伯母さんのスーパ―手伝ってても、とつても気持ちで、伯母さんも年だからジツケンがないし……」

か細い声だけど、一度口火を切ったら止まらないらしく、母は言い訳がましいことを並べ続ける。

「三人で力を合わせれば、東京で何とか暮らしていけるんじゃないかしら」

父はずっとうな垂れたまま、母の話を聞いている。都合のいい母の言葉にムカつく。それにしても、父と母は別れた後も、私の知らないところで、お互いに連絡を取り合っていたのだ。

「死んだってあんたらとは暮らさないよ！ 帰れよ！」

「松野屋」の看板を少しでも守りたいというプライドと、「松野屋」を潰した父への意地から、母は一生懸命おにぎりを作り、私は夜遅くまで煙草を売っていたのではないのか。

私は立ち上がる。和子さんが私の膝から手をさつと引く。障子戸を後ろ手でピシャツと閉め、階段を駆け上がる。

「マー坊、待てよ！」

むーさんが追いかけて来て、階段下から呼び止める。

自分の部屋に飛び込み、真っ先に、筆筒の奥に仕舞っておいた出刃包丁の包みを取り出す。中野を刺したいと思った時と同じ感情が、湧き起こっている。何重にもマいたタオルを解くと、あのキラキラ光る出刃包丁が出てくる。

誰を刺したいのだ？

父親か？

母親か？

途端、涙が溢れてきた。

声を立てて泣いた。

電気も点けず、陽も落ちてしまった暗い部屋で、出刃包丁だけがキラキラしている。

むーさんが丁寧に研いでくれた包丁で、人を刺すなんて出来ない。出来る訳がない。

漠然とだけど、私が大人になって自立できるようになったら、母と一緒に暮らせると思っていた。なのに、母は一年も経たないのに、私に相談もなく、プライドも意地も捨てて、また父と暮らすことを決めた。

母は、私ではなく父を安易に選んだ。私は母から捨てられたのだ。親子三人でなんて言っているが、私がいなくても、母は父と二人で暮らしたいのだ。そう思ったら、却って気持ちが落ち着いて、涙も止まった。

むーさんの包丁を、またタオルでしっかり包み直し、筆筒の奥に仕舞う。

玄関でむーさんと和子さん、父母が帰りの挨拶をしている声が聞こえる。

庭に面した窓際に行つて、窓を透かし、二人の後ろ姿を二階から見送る。

私は、松野正樹、千鶴子と血の繋がった親子であることは間違いないけれど、この二人の姿を見るのは、これが最後だ。

「マー坊、下りて来いよ。飯だぞ」

父母が帰ってしばらくしてから、むーさんが二階に上がって来て、襖戸越しに声を掛けてくれる。

この一年、母の姿や、話し声や、体温が時々恋しいと思うこともあったけれど、「松野屋」の危機崩壊から、ずっと私を支えてくれたのがむーさんだ。今も支えてくれている。

父と母が私を捨てたのではなく、私が父と母を捨てたのだ。

階下に行き、まずは謝ろうと、

「むーさん、さつきは……」

と言いかけたら、和子さんが、

「さあさあ、熱いうちに食べようよ」

と、アルマイト（アルミニウムを加工したもの）の大鍋おとなべをこたつの上に置いた。

味噌煮込み饅頭だ。

大鍋の煮込み饅頭を三人ですっかり食べきり、こたつの上も片付いて、和子さんが淹れてくれるほうじ茶を飲む。

むーさんが、食後の一服（たばこ）に火を付ける。

大きく煙を吐いてから、

「マー坊、ところで……」

とても真面目な顔だ。

はつとする。

さつき、親の前で取った私の態度を、怒られるのだ。怒られる前に早く謝らなくっちゃと、素早くこたつから足を出して正座する。

「むーさん、和子さん、今日はすみませんでした。親のことは、もうどうでもいいです。これからずっと、むーさんと和子さんと一緒に居たいので、よろしく願います」

二人にぺこんと頭を下げる。

「そんなことは分かっているよ。それより、マー坊はこれからどうしたいかっていうことだよ」

「どうしたいかって、言われても……」

自分の将来を深く考えたことはない。

「松野屋」がケンザイ13だった頃は、高校を卒業したら、二流大学くらいには進学して、四年間、適当に勉強して自由に遊びたいなあ、と、思っていただけだ。

「急にそんなこと言われたって、将来どうしたいかなんて分からないわよ。ねえ、マー坊」

和子さんが助け  を出してくれる。

「親父さんもおふくろさんも、マー坊と暮らしたいっていう希望は捨てていないみたいだけど、マー坊が親との縁を切る覚悟なら、これからどうやって生きていくか、しつかり考えておくんだな」

むーさんは、一年遅れでもいいから、高校に行くのはどうかとも言う。

それに、いつの日か、高円寺に帰らなくてはいいけないと言うのだ。

「なんで？」と尋ねても、

「帰らなきゃいけないんだ。マー坊は高円寺で生きていくんだ」と繰り返すばかりだ。

その夜、布団に入ったけれど、目が冴えて眠れない。外は雪が降り始めたみたいだ。

長野の夜は、14ヒョウテンカまで気温が下がる。エアコンを設置しようと言っていたけれど、設置しないまま、また冬になってしまった。

「川上リング園」ですっと働くのはどうだろうか？ 一人前になって、リング園を経営する？ そうしたら、高円寺には帰れないし、リング作りに情熱を持てると思えない。

長野市内で仕事を見つけて就職する？ 高校中退の私を、正規で雇ってくれる所があるだろうか？ せいぜいアルバイトだ。目

が醒めると、朝になっていた。

枕元の電気スタンドは点いたままで、横に一茶句集（信濃国出身で江戸時代後期の俳人である小林一茶の句集。正雄はむーさんの影響で読み始めている）がうつ伏せに置いてある。
15 アマリにも眠れないから、一茶句集を本棚から取り出して、布団の中でバラバラ見ている内に、眠ってしまったのだ。
やっぱり、夜の間に雪が降り積もったようだ。雪の仄白い反射光がカーテンから漏れている。鼻先の感覚がないほど冷え切っているから、部屋の中でもヒョウテンカのはずだ。

足元の行火（足を暖める道具）を両足で挟んで、太ももの辺りまで引き上げる。行火があっても体が悴んでいる。布団の中から手を伸ばして、句集の伏せたページを見る。

うそ寒や 親といふ字を知てから

「親」の漢字にむつとなる。

他にも、ページの角を大きく折り曲げたところが、何力所もある。句集を開くのは三度目で、新品同様のきれいな本に、随分大胆な折り曲げ方をしたものだ、覚えていない。

寒き夜や 我身をわれが 不寐番（一晩中ねないで見張りをすること）

特にこの句は、昨夜の私の心境にぴったりだったので、ページを折り曲げた記憶がある。

それにしても、気の滅入る寂しい句ばかりだ。一茶は継母と仲が悪くて、十五歳の時、父親が江戸に奉公に出したと、むーさんから聞いたことがある。十五歳なら私と大して変わらない年齢だ。親に追い払われたことも似ている。

私の将来も、一茶と同じで、暗くて寂しいものになるのだろうか。

行火を胸の所まで手繰り上げ、ダンゴ虫みたいに体を丸めて、行火を抱きしめる。

机の上の置き時計を、掛け布団のすき間から上目遣いに見ると、八時を指している。いつもより二時間も寝坊してしまった。

「おはようございます。きのうの夜は、いろんなことを考えてたら眠れなくなっちゃって……寝坊しちゃって……」

むーさんは前の冬と同じように、こたつの中で寝そべって本を読んでいる。

「ねえ、むーさん、僕、きのう眠れないから一茶の句集読んでんだ」

「ほう、そうか。いいだろう、一茶って」

「今朝起きて、句集を見たら、暗い句ばかり選んで、印を付けてた」

「夜中に読んだからだろう」

「そうかな」

「どんな句だ？」

⑧「今の僕に一番ぴったりだと思ったのが、寒き夜や我身をわれが不寐番」

「マー坊、なかなかいいセンスしてるじゃないか」

「きのう、むーさんに言われた将来のこと、気合入れて考えないとダメだね」

和子さんがトーストと目玉焼きを運んで来てくれた。紅茶もある。

⑨「マー坊、ひと晩ですっかり大人になったのね」

「ひと晩で大人になることもあるのさ」

と、和子さんに応えるむーさんの言葉に、訳もなく涙が出てきそうになる。

問1 〓線部1～15のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 〓線部A「氣丈に」(2ページ)・B「堂に入っている」(4ページ)とありますが、この言葉の本文中の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A 「氣丈に」(2ページ)

- ア 必死に歯をくいしばって
- イ 心を強く持つて
- ウ 心の準備をして
- エ 心を落ち着かせて
- オ わざと明るくふるまうて

B 「堂に入っている」(4ページ)

- ア 手慣れていて
- イ どっしりとしていて
- ウ 男らしくて
- エ すばやくて
- オ 目について

問3 ……線部X「むーさんに話したら気持ちがスツとして、体の震えも止まった」(4ページ)・Y「私は、むーさんの背中から響いてくるむーさんの声を、しっかりと心に留めた」(6ページ)とありますが、正雄にとってむーさんはどのような存在ですか。それが暗示されている表現を……線部XからYまでの範囲で探し、十五字以上二十字以内で抜き出して答えなさい。

問4 〓線部①「さっきまで真っ白だった頭の中に、血液がようやく流れ始めてきた」(5ページ)とありますが、このときの正雄の状態を六十字以内で説明しなさい。

問5 〓線部②「そんなことより、本当に中退してもいいのか」(6ページ)とありますが、なぜむーさんはこのように言ったのですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 中卒で社会に出て働く中で多くの挫折を味わい尽くしてきたため、正雄にづらい思いをさせなくなかったから。

イ 学校生活が楽しくないとはいえ、軽々しく中退ということばを口にしてしまう正雄に説教しようと思ったから。

ウ 自分のことを慕ってくれるのは良いが、甘いことばかり言っている正雄に世間の厳しさを教えようとしたから。

エ 自転車することに話題をそらすとする正雄に、まずは学校生活を充実させるために努力をしてほしかったから。

オ 自転車のことに気を取られる正雄に、話題を高校中退の件に戻してどこまで本気なのか確かめようとしたから。

問6 〓線部③「今夜、母は、父への定まらない想いに、はつきりと決着を付けたのだ」(8ページ)とありますが、このときの母はどのような気持ちですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 夫との関係をどうすべきか悩んでいたが、借金取りに押しかけられる中で頼れるのは正雄だけだと思い直した。

イ 夫婦で協力して和菓子屋を営んできたが、夫の作った借金にこれ以上振りまわされるのはやめようと腹をくくった。

ウ 迷惑をかけられた夫に複雑な感情を抱きながらも、夫が帰ってくる日のために今できることをしようと決意した。

エ 別れようと思いつつも夫を気づかしてしまっていたが、これからは夫を当てにせずに生きていこうと決心した。

オ 夫と連絡が取れないのは不安ではあるが、息の詰まる生活から抜け出すためなら何でもしようと思き直った。

問7 ―線部④「私は少し恨みがましく言ってみた」(8ページ)とありますが、この時の正雄はどのような気持ちですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 高利貸しからの嫌がらせを受けてとても心細い思いをしたので、父の代わりにむーさんに守ってもらいたかったと不満を感じている。

イ 包丁を持ちだした日から初めてむーさんに会えたので、甘えたいと思いいつも素直に表現せずにむーさんの様子をうかがっている。

ウ 包丁を持ちだした自分をむーさんが嫌いになってしまったのではないかと少し不安を覚え、むーさんの気持ちを確かめようとしている。

エ 中野への怒りから持ち出した包丁をむーさんに預けたままにしていたので、むーさんがそのことを母に告げはしないか心配している。

オ 松野屋の危機に直面しても、むーさんに言われたとおり母を助けてきたことを誇らしく思い、それを褒めてもらいたいと思っている。

問8 ―線部⑤「随分と錆びてたでしょ」(10ページ)とありますが、むーさんが研いだことで、出刃包丁は正雄にとってどのようなものになりましたか。解答欄につながるように四十字以内で説明しなさい。

問9 ―線部⑥「またまた、怒りがこみ上げる」(13ページ)とありますが、この時の正雄はどのような状態ですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア つらいことにも去年決着をつけて今さら話すことなどないのに、態度をはつきりさせない両親にさらにいきどおりを覚えている。

イ すっかり忘れていた両親が現れたことに腹を立てるとともに、大事な話を自分たちから言い出さない両親の態度を情けなく思っている。

ウ 両親の都合でさんざん悲しい思いをしてきたのに、今また両親の気まぐれで迷惑をかけられるのではないかと嫌な予感を感じている。

エ すでに終わったことを蒸し返さないでほしいと思っているのに、三人で暮らしたいと今さらながら提案してきた両親に腹を立てている。

オ 息子を他人に託しても平気である両親に怒るとともに、肝心な話でさえむーさんに言わせようとする両親を卑怯だと思っている。

問10 ―線部⑦「私が父と母を捨てたのだ」(16ページ)とありますが、正雄はなぜこのように思ったのですか。その理由を九十字以内で説明しなさい。

問11 〰線部C「助け を出し」(17ページ)とありますが、 に当てはまる漢字一字を答えなさい。

問12 ―線部⑧「今の僕に一番ぴったりだと思ったのが、寒き夜や我身をわれが不寐番」(19ページ)とありますが、正雄はなぜ「ぴったり」だと思ったのですか。「寒き夜や我身をわれが不寐番」の句の内容もふまえて一〇〇字以上一二〇字以内で説明しなさい。

——線部⑨「マー坊、ひと晩ですっかり大人になったのね」（19ページ）とありますが、和子さんは本文の中でどのように描かれていますか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 正雄を孫のように感じ、その成長を日々見守ることができていることに喜びを感じている。

イ 正雄の孤独な状況に同情し、美味しいものをふるまうて満足させようとしている。

ウ 出過ぎたまねはしないが、正雄がこれ以上傷つかぬように両親から守ろうとしている。

エ むーさんと正雄が良い関係を維持できるように、常に場を和ませようと心がけている。

オ 正雄の気持ちに寄りそい、落ち着いて生活できるようにそれとなく気づかっている。

